



岡山県下で最初に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定される



【吹屋集落の町並み】ベンガラ格子と石州瓦による重厚な商家が連なる町並み



【郷土館(下片山邸)】妻入の入母屋ベンガラ格子の代表的な建物で、石州大工(島田綱吉)の建築で屋根は石州本焼、樺、栗、桜など最上級用材と建築の繊細さに感嘆

ベンガラがこの世に生んだ 未曾有の町 備中吹屋

岡山県

戦国の世から、江戸、明治、大正の長きに渡り西日本最大の銅山として、さらには日本最大のベンガラの町としておおいに栄えた町である。

銅山は、江戸期には住友家(泉屋)、明治期には三菱の創始者岩崎弥太郎により最盛期を迎え、ベンガラはローハ製造御三家、ベンガラ製造五家を中心に全国一の産地に成長、昭和の初めまでその繁栄は続いた。

ベンガラは絵の具、染め織り、陶磁器、漆器の他防腐剤など多彩な用途に持ちられる顔料。吹屋ベンガラは巨大な市場を席捲していた。

また吹屋街道を拠点として銅、砂鉄、薪炭、穀物などを集散する問屋も多く、荷駄の行列が吹屋に続き、旅籠や飲食店建ち並ぶ山間の市場としても成長する。

吹屋からは馬で成羽に運ばれ、そこから高瀬船で玉島港、さらに上方へと輸送された。

それにしても見事な近世の集落である。下谷、下町、中町、千枚によって構成され約二百二十軒の建物が建ち並んでいる。中でも中町の景観は素晴らしく、郵便局や雑貨屋に至るすべての建物が中世から近世の造りを見せ、町並みに溶け込んでいる。建物はいずれも大きく、入母屋、切妻、中二階、妻入りまたは平入り、ベ

ンガラ壁、なまこ壁、ベンガラ格子、赤褐色の石州来待瓦で構成されている。吹屋は昭和五十二年伝統的建造物群保存地区に指定されているが、合せて七十七軒の建物も伝統的建造物に指定されている。価値高い建造物群が残されている証である。

石見人として誇らしい話がある。それはこの町並み建設の中心となったのが石見の大工、石州の瓦職人たちだったことである。巨万の富を築いた吹屋の町屋衆は、全国に知られた石見の宮大工を招き、さらには石州瓦の職人たちを住ませ、この地で石州来待瓦を造らせたという。

石州瓦の耐寒性が、冬ともなれば深い積雪に覆われ氷点下を下回る吹屋の町に必要だったのであろう。



【西江邸】江戸時代中期の家屋を代々の当主が守り継承している

吹屋ベンガラ隆盛の礎を築いた家
国登録有形文化財 西江家

古くは鎌倉時代以来の守護大名「三浦氏」を祖に持つ西江家。戦国乱世を生き延び、江戸時代中頃、六代目西江兵右衛門よって「本山鉦山」が開発され、「ローハ」そしてベンガラの生産にも成功する。以来、西江家は、近在大庄屋として繁栄、居宅は代官御用所を兼ねることになる。

西江家のベンガラは「赤の中の赤」と賞賛される他のベンガラが「弁柄」と記される中、唯一「紅柄」と銘うたれるほどであった。

現存する建物の多くは江戸時代中期の建造。格式を伝える屋敷構え、楼門、中に入ると武家にしか許されなかったと言われる「五間続きの部屋」など往時の隆盛を伝える造りが随所に残されている。

訪れたとき、なんと十八代目の当主ご夫婦に案内をしていただく幸運に恵まれた。西江家は、四百年に渡ってなお暮しの舞台となっている。このこと自体、奇跡と言ってもいいであろう。現在、蔵や庭など一部が公開されている。日本伝統の建築様式とともに、日本の暮しの格式に触れることができる。



一般公開されている西江邸の庭



弁柄とその製造に使用された道具など

通りに面した外観は、一階に腰高格子を飾る袖壁や出格子、二階はなまこ壁で仕上がるなどその意匠性は破格の感がある。

片山家には下片山などの分家があり、その建物は現在郷土館として訪れる旅人を招いてくれる。本片山家とともにぜひ見学してほしい建物である。

【旧片山邸】宝暦9年(1759)の創業以来、200年余年にわたって吹屋ベンガラの製造・販売を手がけた老舗

吹屋随一のベンガラ商人 片山邸
市の重要文化財に指定されている片山家は、宝暦九年(一七五九)創業以来二百年に渡ってベンガラの製造販売を手がけた老舗。ベンガラ商としての店構えをそのままに残す母屋とともに、製造工場とも言うべき建築物が八棟建ち並び、高いの大きさをそのまま伝えていく。屋敷は屋久杉などの銘木を使った欄間やアンティーク溢れる照明器具、鋳物で作られた小道具類など、町屋衆のさりげないオシャレ感が随所に垣間見える。

石州赤瓦で葺かれた二階建て(一部三階建て)の主屋は、江戸時代後期に建てられた切妻造り平入りの主体部分に、後に仏間が加えられ、明治に入ってさらに入母屋造り妻入りの座敷が増築されている。



【広兼邸】ローハ(ベンガラの材料)の製造で財をなした大庄屋。桜門づくりお城を思わせる石垣と威風堂々の大部宅



現在活用される小学校では日本一古い吹屋小学校

日本最古の現役小学校 吹屋小学校

明治三十三年木造平屋の東校舎、西校舎竣工、四十二年木造三階建ての本館竣工以来今日なお学び舎として活かされている吹屋小学校。

石州赤瓦の屋根とやや黒ずんだ下見板張りの典型的な木造の学校。一昔前までは各地に見られたものである。建物の背面に幅三間くらいの空間、無柱のフロアリングの空間で「三間廊下」と呼ばれる雨天運動場がある。無柱で強度を保持する工夫であろう。天井に二五〇から三〇〇ミリメートルくらいの太い梁が上下二段に組まれていて、その間を計三本の筋交いが逆V字形に連続して交差している。

力強くダイナミックな構造である。

その他にも、本館二階講堂内部の折上天井や演壇、天井を支えるトラスト構造など明治期の建築手法を随所に見ることが出来る。

人にやさしく肌に温かい……。学び舎とは本来こうした空間であったのであろう。

吹屋小学校の雄姿、今は夕方から夜の九時まで毎日ライトアップされている。必見の学び舎であろう。

ローハ製造の家 広兼家の壮大な屋敷

吹屋から車で約五分 江戸から明治にかけ銅山経営とローハ(ベンガラの材料)製造で巨万の富を築いたとされる大商屋広兼家。

敷地二、五八一平方メートル、山城を思わせるような高い石垣と楼門造りの威風堂々とした外観の中に、長屋門、門番、不寝番部屋、母屋、離れ、土蔵三棟、厩舎、下男下女部屋など多数の建物と間取りで構成されている。

石垣は文化二年(一八一〇)の創建、離れ座敷は大正時代の増築で当主の結婚式に一度使用されただけといわれる。



断崖の要塞を思わせる広兼邸「八つ墓村」のロケ現場でもある。県指定重要文化財

